

令和3年度第1回仙台市協働まちづくり推進委員会 議事録

○日 時：令和3年11月17日（水）10:00～

○場 所：仙台市役所本庁舎2階 第5委員会室

○出席委員：高浦康有委員長、其田雅美副委員長、石田祐委員、石塚直樹委員、  
大庭克己委員、佐々木綾子委員、傳野貞雄委員、沼里理恵委員、  
緑上浩子委員

○欠席委員：安藤歩美委員、高橋由佳委員

○事務局：市民局長、市民局理事、協働まちづくり推進部長、市民協働推進課長、  
企画係長、事業推進係長、NPO認証係長、地域政策課長、  
市民活動サポートセンター長、他担当職員

○次第

1 開会

2 議事

(1) 今年度委員会の審議内容について

(2) 協働によるまちづくりのさらなる推進に向けて（意見交換）

テーマ：より多様な主体を巻き込み、つながりを育む協働

3 その他

4 閉会

## ○会議内容

### 1 開会

[事務局（企画係長）]

ただいまから令和3年度第1回仙台市協働まちづくり推進委員会を開催いたします。

議事に入ります前に、当委員会の定足数を確認させていただきます。本日は安藤委員、高橋委員から欠席のご連絡をいただいております。11名中、9名のご出席をいただいております。出席が過半数を超えておりますので、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第4条第2項の規定に基づき、会議は成立いたしますことをご報告申し上げます。

ここで、市連合町内会長会の役員改選に伴い、今回から島田委員に代わりまして傳野委員に本委員会の委員をお願いすることとなりましたので、委嘱状を交付させていただきます。

(傳野委員に市民局長から委嘱状を交付)

[事務局（企画係長）]

ここで、傳野委員より一言ご挨拶を頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。

[傳野委員]

市連町会からこの場に出席するということ、とにかく常に全力で仙台市の発展と我々町内会の発展を願ってひたすら毎日過ごしている次第です。昨日は、市民局長も同席で町内会役員永年勤続表彰式があり、30年、あるいは20年、10年と町内会長や役員をやられている方がおられるわけですが、そういう皆さんからのご支援を背中に背負って頑張ろうということで、私の団地そのものも40%台の高齢化率ですが、そんな私たちでも、仙台市に貢献できるということであればお手伝いさせていただきたいと思っております。微力ではございますが、今後ともよろしくお願いいたします。

[事務局（企画係長）]

ありがとうございました。

傳野委員には島田委員の残りの任期を引き継いでいただきますので、よろしくお願いいたします。

次に、4月の人事異動で着任した市職員をご紹介します。

(以下、檜森市民局長、市川地域政策課長、鈴木NPO認証係長、岡本企画係長の紹介)

### 2 議事

(1) 今年度委員会の審議内容について

[事務局（企画係長）]

それでは、ここからの議事進行は高浦委員長にお願いいたします。

[高浦委員長]

皆さん、おはようございます。今年度第1回目ということで、本当はもう少し早い時期に皆さんとお顔合わせできたはずでしたが、コロナの影響で流れてしまったということで、今回仕切り直しで、改めてお願いしたいと思います。

また、傳野委員におかれては、以前から仙台市の事業の審査会で一緒させていただいておりますが、ぜひこちらの委員会でもご意見頂戴できればと思っております。よろしくお願いいたします。

では、まず今回の議事録署名人については、大庭委員にお願いしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。では、よろしくお願いいたします。

それでは、議事のほうに入らせていただきます。議事の1つ目になりますが、今年度委員会の審議内容について、事務局から説明をお願いいたします。

[事務局（市民協働推進課長）]

今年度の当委員会につきましては、9月に本来第1回ということで予定しておりまして、皆様にもご案内差し上げていたところですが、コロナの感染拡大の状況によりまして、急遽中止とさせていただきまして大変申し訳ございませんでした。このため、今回が今年度初めての委員会の開催となりました。どうぞよろしくお願いいたします。

それではまず、資料1をご覧ください。協働まちづくり推進委員会の審議内容についてでございます。協働まちづくり推進委員会は、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例を根拠として設置されております本市の附属機関でございます。平成27年7月から委員の任期を2年として開催してきており、現在の委員会は第4期目ということになります。1期から3期までの委員会の審議経過の概要につきましては、1に記載のとおりでございます。令和2年4月からスタートしました第4期の委員会におきましては、昨年度、「協働まちづくり推進プラン2021」の策定につきまして、3回の委員会を開催し、策定の方向性、中間案、最終案についてご意見をいただきました。おかげさまで令和2年度末に現在のプランを策定しまして、今年度から新たなプランをスタートしたところでございます。第4期の2年目となる今年度は、「協働によるまちづくりのさらなる推進に向けて」という大きなテーマのもと、小さなテーマを設けまして皆様に意見交換をいただきたいと考えております。今年度の委員会は、今回の11月と2月の2回ということで、開催したいと考えてございます。

次に、資料1-2をご覧ください。今期の委員会における意見交換の進め方についてでございます。ここで、お手元のファイルの「協働まちづくり推進プラン2021」17ページをお

開きいただければと思います。協働まちづくり推進プランの取り組みの方向性というページでございますけれども、その重視すべき視点として、3つの視点を設定しております。この視点につきましては、昨年度の委員会で皆様に中心にご議論をいただきましたところでもございますので、今後の協働まちづくりの取り組みの3つの柱と位置づけられますことから、今年度の委員会ではこれら3つの視点をテーマとして意見交換を行っていきたいと考えております。資料1-2にお戻りください。1の意見交換の趣旨でございますが、今ご覧いただきました3つの重視すべき視点をテーマとしまして、各委員からそれぞれのテーマに関連するご自身の活動状況ですとか経験や知見に基づくご意見等について、ご発言及び相互の意見交換をしていただきたいと思いますと考えております。いただいたご意見は、今後の施策展開に生かすとともに、事務局で整理の上、来年度以降の委員会での議論にも活用していきたいと考えております。2の意見交換の内容でございます。今お話ししましたように3つの重視すべき視点をテーマとしまして意見交換を行っていきますけれども、それぞれのテーマは少し抽象的な書き方をしておりますので、皆様方に具体的なイメージを持っていただくために、意見交換に先立ちまして、事務局からそれぞれのテーマに関連した取り組みについての話題提供を行いたいと思っております。3の実施時期でございますが、今年度の委員会はもともと3回の予定が2回になってしまっておりますので、テーマ1について本日の委員会で、テーマ2と3につきましては2月に予定している第2回委員会で実施したいと考えております。4の意見交換の流れでございますが、本日これから予定をしている意見交換に関して具体的にご説明いたしますと、まず事務局のほうからテーマ1「より多様な主体を巻き込み、つながりを育む協働」に関連する本市の取り組み事例について話題提供いたします。具体的に言いますと、市民協働推進課で実施している事業のうち、若者が活躍するまちづくりと地域課題解決プロボノ活用、この2つについてお話をいたします。どちらの事業も、先ほどご覧いただきました協働まちづくり推進プランに掲載している事業でございます。プランの34ページに若者が活躍するまちづくりが掲載されております。分野3(1)の①という事業です。また、もう一つの事業、地域課題解決プロボノ活用につきましては、20ページ、分野1(1)の③に位置づけている事業でございます。10分程度で話題提供させていただき、その後、皆様には話題提供の内容を話のきっかけやヒントとしながら、テーマに関するご発言ですとか意見交換いただきたいと思いますと考えております。今回、若者とプロボノ、2つについて話題提供いたしますけれども、その範囲にとどまるのではなくて幅広くテーマに関してということで、皆様それぞれのお立場から、日頃のお取り組みやご経験の中で、そのテーマに関する現状や課題についてお考えのことですとか、このようにしたらいいのではというご意見など、幅広く意見交換いただきたいと思いますと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。事務局からの説明は以上でございます。

[高浦委員長]

ありがとうございました。今年度の委員会の審議内容ということで、具体的な話題提供についてはこの後お願いすることになりますが、今までのところで、いかがでしょうか。昨年度、皆さんにかなり議論いただきまして、このプラン2021、何とかつくり上げることができて改めて感謝申し上げたいと存じますが、市民協働推進課の事業のみならず、仙台市の施策にこの3つのテーマ、方向性が今後反映されていくはずということで、新規事業もいろいろとプランの中にリストアップいただいていますけれども、いかがでしょうか。今のところは特にないですかね。具体的な話題提供をいただきながら、またイメージを深めていただけると、より議論しやすくなるかもしれませんね。

## (2) 協働によるまちづくりのさらなる推進に向けて（意見交換）

テーマ：より多様な主体を巻き込み、つながりを育む協働

[高浦委員長]

それでは、議事の2つ目の協働によるまちづくりのさらなる推進に向けてに進みたいと思います。先ほど議事の1つ目でご説明のありましたとおり、最初に事務局から話題提供をお願いいたします。

[事務局（事業推進係長）]

お配りしてございます資料2と併せてパンフレットや別紙資料にて、ご説明させていただきます。

私どもの若者が活躍するまちづくり事業は、若者の対象をおおむね18歳から30歳代としまして、3つの個別事業で構成してございます。

初めに、仙台若者アワードについて説明させていただきます。仙台若者アワードは、若者団体の社会貢献活動を表彰するとともに、若者と企業などの多様な主体との連携による取り組みを促すなど、若者の社会参加の促進を図ることを目的といたしまして、コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社、若者の支援等の活動を行っております一般社団法人ワカツク、それから本市で実行委員会を組織いたしまして、平成29年度から実施してございます。社会貢献活動を行っている若者団体を公募いたしまして、公開プレゼン形式で審査・表彰を行う表彰部門に加えまして、令和2年度からは企業と協働でSDGs達成の取り組みを行う若者団体を募集し、地元企業とマッチングして一緒に取り組んでいくという協働部門を開始してございます。

資料、スライドの2ページ目、若者アワードの令和2年度の実績でございます。表彰部門のプレゼン審査は、例年ですとイベント形式で開催してございましたが、昨年度はコロナ禍もございまして、オンライン形式での開催となりました。令和2年度の若者団体の表彰部門への応募は14団体ございました。また、初めて実施いたしました協働部門は、地元企業2社のご参画をいただきまして、若者団体と協働の取り組みが行われました。その中から、古紙の売上げの一部を子供食堂の寄附金とする取り組みが東北工業大学の学生を中

心として行われるなど、成果があったものでございます。なお、今年度は、今月26日に今年もオンライン形式でのプレゼン審査を実施する予定でございます。若者アワードについては、以上でございます。

続いて、スライドの3ページ、仙台まちづくり若者ラボでございます。この事業は、若者自らが「自分ごと」として関われるまちづくりのテーマを設定いたしまして、実践型のプログラムを実施しその成果を発信・共有することによって、若者の視点やアイデアを地域課題の解決や地域活性化に生かし、ひいては「主体的に動く若者」ですとか将来の協働パートナーの発掘・育成を目指すものでございます。内容といたしましては、市内に居住または通勤・通学している18歳からおおむね30歳の方の参加を募り、ワークショップ、フィールドワーク、それから最終報告会を開催いたしまして、それらの活動は同年代の社会人の方がメンターといたしまして相談や助言を行う役目としてサポートをするようにしてございます。フィールドワークでは、参加者の皆さんは「まちの特派員」として、まちに潜在する様々な人ですとか取り組み等を取材していくものでございます。

スライドの4ページでございます。令和2年度は29名が参加いたしまして、6つのグループに分かれて活動いたしました。グループで取材・探求したアイデアなどを報告会で発表するまでが一連のプログラムとなっております。報告会で発表された参加者のアイデアやアクションの一部をスライドの資料でご紹介いたしますと、作並地区の活性化を図るというアクションですとか、街歩きアプリを開発したいといったものですとか、あと仙台は大学や研究機関が多い都市と言われてはいますが、卒業後も選ばれるまちになっていくために、大学等の新入生対象のイベントを行っていききたいといったものがございました。発表内容の一覧は、先ほどご紹介しました別の資料に概要を記載してございますので、後ほど参考にしていただければと思います。

続いて、スライド5ページでございます。今年度の状況ですけれども、10月時点で33名の参加をいただいております。今年度は7月から活動しておりまして、ワークショップやフィールドワークを重ねてまいりました。12月1日に最後の報告会の実施を予定してございます。

続いて、スライドの6ページ、若者版・市民協働事業提案制度でございます。こちらは、NPOや企業等が持つ専門性を生かして地域課題等に仙台市と協働で取り組む市民協働事業提案制度というものを平成24年から実施しており、この制度の若者限定版の制度として今年度から開始したものでございます。若者にとって身近なまちづくりについての事業提案を募集いたしまして、市と協働で取り組むことによって、若者の発想を生かしたまちづくりを推進することを目的としております。内容といたしましては、実施の体制図のイメージをつけてございますが、提案団体に対しましてサポート団体による支援、伴走支援を行いながら、私どもと協働で取り組むとともに、1事業当たり30万円を上限といたしまして事業負担金を交付するものでございます。私ども市が委託したサポート団体が若者団体を事業提案の段階から総合的に支援することとしており、市民協働推進課が市の協働の窓

口となって関係する部署、関係する団体との連携の調整を図りながら進めていくこととしてございます。

スライドの7ページに今年度実施している2つの事業をご紹介します。1つは、広瀬川の空間資源を生かしたプログラムの実施を通じて、快適に遊べる水辺環境をつくり、広瀬川に親しむ市民を増やすということを目的といたしましたミズベフェスタ事業というもの。もう一つは、立町地区におけるコミュニティの活性化を目的といたしました立町エリアにおけるコミュニティスペースの提供事業となっております。若者に関する事業の説明については、以上でございます。

続いて、8ページ、地域課題解決プロボノ活用事業について説明いたします。まず、プロボノという言葉は、ラテン語のプロボノパブリコという言葉が語源とされているようで、その方が持つ専門知識や経験を生かして社会貢献活動を行うボランティアの意味でございます。個人ですとか企業による地域活動や社会貢献活動への参画を後押しするとともに、市民が持つノウハウやスキルを地域団体や市民活動団体の皆さんの支援につなげる仕組みを構築し、地域課題解決のために多様な主体による協働を進めていくことを目的といたしまして、今年度から新たに実施してございます。内容といたしましては、モデル事業として、今年度2つのプロジェクトを実施してございます。8月から来年1月までの間、オンライン形式も併用しながら、月に二度、三度とミーティングを行っていくこととしてございます。

続いて、スライド9ページでございます。実施体制のイメージをつけてございます。プロボノ参加者の募集などをコーディネート団体に業務委託しまして、プロボノとプロボノを活用する地域団体などの協働をサポートする形で進めてございます。

続いて、10ページでございます。今年度モデル事業として実施しております2つの事例を簡単にご紹介いたします。1つは、南小泉南地区社会福祉協議会・第5ブロックという肩書になりますが、地区としては若林区の遠見塚地区になります。「誰もが住みやすい、安心安全のまちづくりプロジェクト！」としまして、安心安全なまちづくりに向けた持続可能なしくみ・人づくりをテーマとして、まずはこれまで地域の中で行われてきていたサロン活動がコロナ禍で停滞してしまっているの、その活性化を図るために、運営やサロン活動のあり方みたいなものを見直し、新たな参加者層や子育て世代も取り込んでいけるようにプロボノとアイデアを出し合ってプランを考えていくものということで、5名のプロボノが参加しております。

11ページのもう一つの事例は、泉区の住吉台地区社会福祉協議会で行っております「高齢化もなんのその。笑顔あふれるまちづくりプロジェクト！」でございます。こちらは、今後の超高齢社会に備えた笑顔あふれるまちづくりというのをテーマといたしまして、さらなる高齢化に備えた地域住民の不安ですとかニーズを明確にするために、地区内の住民に対するアンケートの実施ですとかその分析を行って、今後の実行プランなどを考えていくものとなっております。こちらは、6名のプロボノが参加しております。

簡単ですが、話題提供の資料の説明は以上でございます。

[高浦委員長]

ありがとうございました。事務局から仙台市の取り組みについて、市民協働推進課を中心とした取り組みについて話題提供いただきました。

ここからメインディスカッションというような形になっていくかなと考えておりますが、今話題提供いただいたその内容に関してのみならず、ただいまの内容をこれからの議論のきっかけ、またヒントとしていただきながら、本日のテーマであります「より多様な主体を巻き込み、つながりを育む協働」、そのあり方に沿って意見交換させていただければと考えております。例えばということで、意見交換の論点の例としては、市民活動の裾野を広げ、さらに市民の発想を引き出す取り組みとは。あるいは、協働まちづくりへの関わりを期待したい特定層、話題提供の事例は若者、また町内会というところを焦点とした話であったかと思いますが、さらには企業、事業者に向けての効果的なアプローチとはということで、多様な担い手、主体をどう巻き込んでいくのかということ、市民協働推進課からお題を頂戴しているところでございます。先ほどお話しいただいたようなまちづくりの事例、まちづくりに寄与する市の事業についてのご質問等でも結構ですし、日々皆さん活動されている中で、市への期待というところでも結構かと思えますし、いかがでしょうか。

[石田委員]

今ご説明いただいた中で、プロボノは県外から来ている方もいるんですね。私もこの委員会に来る前に、多様な人を巻き込むというときに、仙台市内の人を想定しているのか、もっと遠くの人まで含むのかどちらかなと考えていました。遠くの人がいると、てこの原理じゃないですけども、かなり遠くまで飛ばせるものもあったり、遠くのものから大きな流れがあたりするかなと思うのですが。ただ一方で、自治会、町内会は別に遠くまで飛んでいなくてもいいところもあたりするので。多様な人材を巻き込むときに、どういうふうに広報したら大阪の人とか東京の人が来たのかということをお話していただくとありがたいです。

[事務局（事業推進係長）]

プロボノの募集については、県外の方が半分ぐらい入っておりますが、全国のプロボノプロジェクトにオンライン等で参加する、いわゆる常連のような方もいらっしゃるようで、コーディネートを委託しているNPO法人からのお声かけや広報に興味を持って参加いただいているという状況でございます。

[石田委員]

そういう意味では、ここの議論の場というのは、日本全国とか世界を対象にしたような

つながりを育むということを対象にしていいたいということですね。

[事務局（事業推進係長）]

このプロボノのプロジェクトに関してはそのような状況になりましたけれども、私どもといたしましては、特に今回プロボノプロジェクトの支援といいますか、一緒に課題解決を考えていく団体が地区社協ということで、実態としては地域団体ということですので、できれば市民、市内の方に多く参加していただきたいという考えは持っているところでございます。

[石田委員]

例えば若者のまちづくりのところでも、仙台出身で今東京の大学に行っているけれども、仙台で活動したいといった場合などは対象外ですか。

[事務局（事業推進係長）]

明確に対象外というふうには考えてございませんが、私どもの条例でいう市民というのは、仙台市の住民の方は当然ですけれども、仙台市内に通勤・通学するというところまでは定義してございます。ただ、市外ですとか外国から何らかコミットするところについてどこまでというのは、私ども市民協働推進課としてもあまり議論といいますか検討していないというのが正直なところでございます。

[石田委員]

分かりました。発想のフレーム枠をどこまで広げるかというところもあるので、お尋ねいたしました。ありがとうございます。

[高浦委員長]

若者アワードの応募資格という点では、今お話しいただいたように居住または通勤・通学される若者ということですね。団体として所在する場所が仙台市内に限定されるとか、そういうことは今のところないと。若者版の協働事業提案制度も団体の所在についての制約は特にないということですか。

[事務局（事業推進係長）]

仙台まちづくり若者ラボと若者版・市民協働事業提案制度は、先ほど条例のお話をしましたけれども、市内に通勤・通学するという仕切りにしてございます。若者アワードについても、基本的には市内で主に活動している団体というのを対象にしているところでございます。

[高浦委員長]

そうした担い手の人に対して、またプロボノとか、地域外、市外からもご支援いただけるような方がいらっしゃると心強いですね。

せっかく若者アワード、ラボ、そして若者版の事業提案制度という三本柱的に動かしていただいて、実質的な助成金のようなものがつくのは協働事業提案制度かなと思うのですが、若者アワードやラボでいいアイデアが出てきて事業化していきたいとなったときに、若者版の提案制度にうまくことつながっていくといいなと思いますが、その辺の道筋も考えられながら進められるということによろしいですか。

[事務局（事業推進係長）]

委員長のおっしゃるとおりの道筋は考えてございますが、その道筋がなかなか難しいかなと考えております。

[高浦委員長]

その課題というのは、事業の継続をしていくとなると、アイデアベースとはまた敷居が違ってくるとい、ハードルみたいなところでしょうか。

[事務局（事業推進係長）]

そうですね、そのアイデアをこしらえたグループですとか団体の継続性みたいなところも一つハードルというか課題かなと思います。

[高浦委員長]

あと大学生の事業提案といいますかアイデア提案が多いですね。

[事務局（事業推進係長）]

特に学生ですと継続性という部分が難しいので、アイデアはすごくいいものがあったとしても、その実行の手法をどう確保するかが一つの課題なのかもしれません。

[高浦委員長]

そのあたりもうまく回していらっしゃるNPOとかがあれば、例えば震災支援で大学生を中心にボランティア的に始まったReRootsですと、農業法人化しようとかそういうところまで目指しているると事業部門も持ち上がったりしますよね。そういう、どのように後継者を育て事業継続していくのかというところで、いろんなヒントがまた既存の活動団体から得られるといいですよ。

[緑上委員]

すごく基本的なことをお聞きしたかったのですが、地域課題解決プロボノ活用事業では取りあえずモデル事業として2つのプロジェクトを実施ということですが、公募したのでしょうか。

[事務局（事業推進係長）]

今回のモデル地区の選定に当たっては、仙台市社会福祉協議会のボランティアセンターと相談する機会がございまして、モデル地区の調整をしていただいたという経過がございます。公募は今回については特に行ってございません。

[緑上委員]

助言とか色々なアイデア、プロボノ、スキルとか専門知識を持っている方に手伝ってもらいたい地域団体、山のようにあるかと思うのですよね。もう自分たちではにっちもさっちもいなくて前例どおりにしか動けない、固まってしまっているところに、よそからのアイデアを入れて揺り動かしてあげるといことはすごく大事なことだと思います。まだ今回は公募していないということですが、これをやろうとしたときの広報の仕方とか、いろんな条件とかハードルが高かったりすると二の足を踏まれたりとか、逆にあまりハードルが低過ぎると、応募があり過ぎてもそれはそれで問題だったりとかで、良い事業なのですが、これからの展開によってはいろいろ枝分かれしていくなと思いました。また、今もそうなのですが、自分たちで何か地域課題を解決したいと思っても、私たち何とかしたいんですと訴える場がどこなのかというのが分からないという状況があります。担当課に言ってくださいと言われても、どこが担当なのか分からないということがあるので、そういう窓口が明確になっていると、意外と皆さんも声を上げていろんなことが動き出すきっかけになるのかなと思っています。私は岩切に住んでいるのですけれども、岩切は今、貨物駅の移転で周りが色々と造成されていて、公園ができるという話があります。その公園を自分たちが使いたい望ましい公園にする活動をしたいという声が、若いママたちからも上がってきていて、それを何とかお手伝いしてあげたいと思うのですが、どこに声を上げていいものかも分からなくて。公園課に言っても、まだ具体的なことは決まっていないのでと言われてしまうし、でも具体的なことが決まってから動いたのでは遅いし。そんなときに今本当に私の中で切実に、どこに何をどうしたらいいのだろうというのが分からないというのがすごくあります。市民と本当に協働してまちをつくっていかうとするのであれば、そういう分かりやすい道筋をつくってあげることがすごく大事なんじゃないのかなと切実に思っているのです、このプロボノ事業も分かりやすい形で、皆さんが利用しやすい形にしていただければと思います。

[高浦委員長]

岩切の市民協働推進の担当部課といいますか、そういったのはきっとありますよね。そ

ういうところがワンストップ的な形でいろんな課とつないでいただければいいですね。

[緑上委員]

連合町内会がいろいろな行政との窓口にはなっているとは思いますが、今の私が関わっているのは、幼稚園や子育て支援の活動をなさっている団体でネットワークをつくって、子育て世代の方たちの支援活動を今岩切で展開しているのですが、その中で、意外と岩切って遊べる公園がないよねとか、いろんな災害もある地域ではあるけれども防災に注目されている場所もないよねといった話も出ていたりしたので、子育てだけじゃなくて防災面でも、あと地域住民の方、高齢者の方にとっても、居心地のいい場所をつくりたいとなったときはどうすればいいんだと、もうそこでちょっと足踏みしている感じがあります。

[高浦委員長]

そうですね、区の担当課ですかね、何かそういったところでうまく窓口になっていただければいいなと思ったりもしますね。

[傳野委員]

町内会という部分でくくれば、各区にまちづくり推進課というのがございまして、我々はその事務局として、言い方が悪いですけども、使わせてもらったり、あるいは逆に行政のほうの支援を我々もする。郡市長が我々をパートナーという呼び方を昨日もされていますが、我々は推進するエンジンの役を果たしたいという動きをしていますので、まち課と共に全て動いていますから、そういう部分では、まち課を経由すると、まち課が何でも知っていて、いろんな問合せがあっても、そこで具体的に説明ができるということにしておいたほうが良いと思います。まちの中の人たちが一かけらずつ持っているも仕方がないので、やっぱりまち課に事務局を置いてもらっているほうが、一番我々としては何だかんだとまち課に相談しておけば大丈夫というところがあります。

[高浦委員長]

そうですね、町内会とまちづくり推進課とはパートナーということですよ、ぜひプロボノ活用事業、いろんな地域で展開いただいて、モデルの広がりを期待いたしております。

[佐々木委員]

話が前後してしまうのかもしれませんが、仙台まちづくり若者ラボ、本当すばらしいなと思って読んでおりました。先ほどの課題にもありましたが、この若者ラボや若者アワード、そこから市民協働事業提案につなげることがなかなか難しいという課題感がありだということをお聞きしましたが、大人でもなかなか事業化していくことはすごく難しいことでもありますので、これはもう数の原理じゃないですけども、た

くさん生み出す中で一つ本当に物になっていくものが生まれてくるのかなとか、あと学生としても持続していく何かコミュニティというかグループがあれば持続していくのかなといったところをすごく感じました。こういうものが若者の中で当たり前だという考え方があるといいのかなと思っていて、例えば小学生からこういった簡単な若者ラボ小学生版とか、そしてその小学生が中学生になったときに今度小学生のメンター役となっていく。その高校生が今度中学生のメンター役になるという、世代をこうアップしていくといいますが、教えるほうになるとすごく視座が高くなって、こういう何かを生み出すことがすごく身近になり、そしてスキルでもマインドでも身につけていくのかなというふうに思っております。そういう中で、すごくたくさんいろんな数の原理で生まれてきたもので、何かやっとなんかにつながってくるのかなと思いますので、たくさん機会を生み出す、しかも年齢層もちょっと下げていきながら、流れの動線といいますか、そういうものを設計していくといいのかなというふうに思いました。

[高浦委員長]

大変すばらしい夢あるご提案だったと思います。小学生版、中学生版、高校生版ということで、子供たちもまたまちづくりの担い手であるという、そういう視点からさらなる広がりがあるといいですね。学校、教育委員会等とも連携いただきながら、できそうな気もいたしますが、どうでしょうね。大学生になるのを待たずして、どんどん参画いただくという点ではいかがでしょうか。

[傳野委員]

高齢化と若者というところで、接点は何かというところを考えていて、私、パークタウン内の高森8丁目の町内会長をしておりますが、我々35年パークタウンに住んでいるのですが、今の団地というのは子供が生まれて小学校、そして高校、大学と進むと、あと家に帰ってこないんですね。ですから高齢化というパーセンテージで表すと、高齢者が増えていることは若者が少ないからなのですよ。そういうところで、昔から芋煮会ということをして仙台、山形を中心にやっていますけれども、高齢化で芋煮会ができなくなっている町内会が出てきていると。そこで私は、町内に住んでいる宮城大学の先生に、我々の芋煮会を学生でやっていただきたいとお願いしました。買い出しから翌日の料理、提供、片づけ、全部学生にお願いして10年以上になっており、たくさんの方が参加し賑わうので、喜びの声があふれております。学生は最初5、6人だったのが、今では十数名来るようになっており、いろいろなゼミその他の交流やバイト先だとか遠慮なく連れてきてくださいよと声をかけています。そういう交流ってすごく大事なんですよ。だから、先ほど思いついたのですが、そういう組織というか、団体というか、手の足りない高齢者に対して学生を派遣するというふうなプロジェクトがあるといいと思います。地区内に学生は、たくさんいると思うので。

それと、宮城大学看護学部の教授から依頼を受けて、学生が看護師になったときにお年寄りにどんな対応をしたら相手が打ち解けてくれた会話ができるかという勉強のため、町内会の75歳以上の人が学生と2時間ほど会話をするといった協力をしています。お互い会話をしながら共に同じ作業していくと年齢のギャップがなくなっていくということと、近所付き合いといいますか、たまに里へ帰ってきてリンゴを持ってきたとかというような関わりを持つ学生が増えてきているなという実感があります。公園の話がありましたけれども、我々大きい公園を持っています、13日にスポーツ少年団から企業からも80人ぐらい出て、我々と共に300人で清掃したのですけれども、そういう中でジュースを飲みながら会話が始まるのですが、学生がつないでくれるというケースが非常に多くて、たまたま宮城大学の寄宿舍や先生方の宿舍もあるということも手伝って、非常にいい雰囲気が出されているというところがあるので、そういう組織があってもいいのかなと思いました。

[高浦委員長]

高森はとても盛んな地域交流がされているなというふうに思いました。本当仙台圏は幸いなことに大学が多いですので、桜ヶ丘で宮城学院大学と一緒にまちづくりの交流イベントをしていらっしゃるし、東北学院大学もボランティアセンター中心に活発に活動されているらっしゃると思います。そういう点では、若者が地域に関わっていく機会は本当に多いと思いますし、またそこを市や区がバックアップしていただければいいのかなと思います。

[石塚委員]

今の傳野さんのお話を聞いて、まさにそのとおりだと納得しながら聞かせていただいたのですが、今日の話提供で若者が活躍するまちづくりを取り上げていただきましたが、多分その「活躍する」というのは、ある結果の一つの姿というか、だからそこだけを目指さないというか、まずはその関わりを増やしていくみたいなことが目指すべきことかなとお話を聞きながら思いました。私も昨年から東北学院大学に関わらせていただいています、キャンパスが移転するということもあり、今年パートナープロジェクトも活用させていただきながら、荒町・連坊地区と大学との接点をどうつくっていくかということもやっています、その中で少し見えてきたのは、地域の方々、地域の側からの意見というか、こうしたいみたいなことと、学生がこうしたい、こう関わりたいみたいなことのずれが見える化できそうだという気はしています。それが明らかになると、じゃあこういうことだったら一緒にできるねみたいなことが見えてくるかなと思っていましたので、先ほどの傳野さんのご意見も参考にしながら進めていきたいなと思いました。

あと一つ、視点としては、先ほどの事業の関係で、早稲田大学、学生街が形成されていますけれども、いろいろと事例を調べたりヒアリングさせていただいているのですが、今コロナが起きて、早稲田の商店街は学生がお客さんだったんですよね。コロナで学生が大

学に来ないというときに、どうしようとなって困っていたところで、学生たちや早稲田の卒業生たちが、地域の商店街を応援しようということで、自発的にクラウドファンディング、資金集めをしたりですとかPRをしたりというような活動を始めているということも聞きまして、若者が活躍するまちづくりを考えると、短期的な成果だけを求めるのではなくて、その関わりをつくっていく中で、中長期的にそこに住んだことが結果的にいいことを生み出すといった関わりがあるということがいい方向につながるということもあるなというのを改めて思いました。市の事業で成果指標を立てなければいけないところもあると思いますので難しいところもあると思いますが、こういった多様な主体、特に若者と地域の関わりにおいては、短期的な成果だけではなくて中長期的な成果みたいなことを、なかなか見える化しにくいところではあるのですが、考えていけるといいなと思いました。

[高浦委員長]

早稲田の商店街のケースは、私もニュースか何かで見たのですが、たしか応援団のOGがクラウドファンディングや、まちの商店街の飲食店のメニューをSNSにアップしてこんなおいしいのがありますよといったことを若者の視点で情報発信しているところがすばらしいなと思いました。そうした情報発信とかでも、プロボノとか、あるいは事業者がいろいろとバックアップできる場所もあるかと思しますので、ぜひ協働相手として、パートナーとして、事業者等々の巻き込みを図っていただいてもいいなと思います。

若者アワードの協働部門ですと幾つか地域企業が挙がっていますが、この辺の開拓という点ではいかがでしょうか。もっと広がっていくといいなと思いますが、何か広がりについて、もし障壁等あれば。

[事務局（事業推進係長）]

令和3年度の協働部門でも企業の参画を設けてございまして、昨年度とは違う事業者で今年度は2社ございます。この調整は、若者アワードは市のダイレクトな事業というよりは実行委員会を組織しており、事務局を担うワカツクを中心としてそういうセールスといえますか営業をしているところでございます。

[高浦委員長]

事業者として社員をプロボノとして送り込むとか、あるいはご自身の事業のリソースを使ってこうした活動を支援するという、そんなふうにより広がっていくといいなと思います。

[沼里委員]

狭い地域で恐縮ですが、荒井東地区でも、うちの法人でまちづくりに関わった事業をいろいろしていきまして、年に1回大きなまちイベントとか、あと定期的に少し大きめのイベ

ントとか、健康教室とか、ペットセミナーとか、サロンのような地域の方との関わり合いが持てるような機会を定期的につくっているのですが、ぜひこの若者の方の実践の場というか、実績づくりの場として活用してもらいたいと思いました。近隣の施設の方とか、企業や自治会の方と一緒に開催しているのですが、どうしても人の力というかマンパワーが足りなくて、ぜひ実践の場として活用してもらいつつ、一緒にその場をつくり上げてもらえると本当にありがたいなと思っています。若者アワードって私実は知らなくて、今回の機会でも教えてもらう機会になったのですが、皆さんが実際に企画している内容をそのままイベントの中に投入できるのかなとか、ぜひやってみたいなと思いつつも、どこにどういうふうに相談していいのかわからなくて、今までの話を聞いているとまち課に相談すればいいのかなと思いました。ぜひ教えてもらえたらありがたいなと思いました。

[高浦委員長]

ここは本当市民協働推進課としての出番かなと思いますが、この若者アワードにしても、地域のそういう課題について、ぜひ学生、若者に振り向いてほしいんだという、そういう声を反映するような場というか、そういったことをデザインできないでしょうか。

[事務局（事業推進係長）]

どちらにご相談というか、そういう関わりを持っていければいいかという部分かと思いますが、今の個別のお話については、私どもにご相談いただければ、若者アワード事務局経由で、興味のあるような団体におつなぎしていくことも可能なのかなと思います。あとは市民活動サポートセンターですとか、本日お集まりの例えば石塚先生ですとか、特にこのルートじゃないとというのは当然ないと思います。どこに相談したらいいかという場合は、若者関係については、区役所のまちづくり推進課ですとか、私ども市民協働推進課にご相談いただければと思います。

[傳野委員]

今のお話の延長線上になると思うのですが、泉区の場合ですと6大学がありまして、例えば将監では、お祭りだとか、イベントだとか、あるいは食事に困っているお年寄りの買い物だとか、学院大の学生がいろいろお手伝いをしてきているので、学院大の移転に恐怖を感じているという実態もあります。また、6大学が地域と関わった部分についての紹介、例えばいろいろな作品やポスター作りをしたとか、こういうことで喜ばれているといった写真とかを学生が説明もしてくれるというイベントが毎年あります。そのイベントでの紹介をきっかけにつないでくれて、例えばパークタウンでは、どこのお祭りにも全大学を呼んでいます。そこで子供たちが一緒に遊ばせてもらったり、それからお菓子を学生が配ったりすると、子供らって憧れるんですね。いいお兄さんお姉さんができて、いわゆる向上心とともに向学心生まれて、いい子供たちが育っていくのかなと思って、我々

もそういう目で見えています。つなぐのはまち課に係の方がおられますので、大学の学生に手伝っていただきたいという相談は、単発でも継続でも受け付けてくれるはずですよ。

[高浦委員長]

とてもいい情報提供ありがとうございます。地域のお子さんたちも、大きくなったときにまたまちづくりの担い手になっていくという、そんなストーリーも見えて素敵だなと思いました。せつくなので、商工会議所の立場からのご意見いただいてもよろしいでしょうか。

[大庭委員]

今皆さんからご意見を伺い、思っていた以上に学生が地域に出ていて、いろんな活躍をされているというのが伺えたので、非常に勉強になったところですけども、もっともっとまちづくりに関わりたい学生は多くいらっしゃると思います。最近、東北大学と東北工業大学で、仙台の課題、まちの課題、まちづくりとか商店街の今の課題というのを話す機会がありまして、学生はまちで何か課題があったときの解決、例えば商店街はいろんな課題を抱えているんですけども、そういったところで少しお手伝いしたいとか、そういうまちで活躍できるような場所を探していたり、いろんな意見、アイデアを非常にお持ちなのですが、どうやってそういうところに関わっていったらいいか分からないという意見もあるので、まちで活躍できる場がもっともっと増やせたりですとか、そういう課題解決のためにどういうプロセスで関わっていけばいいのかというのは、皆さんのご意見のとおり、どういったところから入っていけばいいのかは、課題があると思えました。

今、商店街はコロナでなかなか人が出ていない中であり、中心部商店街は空き店舗も増え、元気がない状況ではありますが、いずれ若者の皆さんが多くまちに出てきて、賑わいが生まれるようなまちにならないといけないと。若い方の意見を商店街としてもまちの活動に生かしたいというニーズもあるので、そこをつないでいけるように、商工会議所も関わりながらできるような工夫を検討しているんですけども、そういったフィールドとしてまちに関わるようなところを、もっともっと活躍できるような場所をつくっていき、先ほどの佐々木委員がおっしゃったように、たくさん事例を生み出す必要があると思えました。

[高浦委員長]

コロナ禍のインパクトが大き過ぎて、アーケードのお店等々、疲弊しているところも多いのではないかなと思います。ぜひ商工会議所として、例えば若者アワードの協働部門などで、こうした企業とおつなぎできますよといったような、いろいろと情報提供やご助言いただけるとありがたいなと思っています。本当おっしゃったように、解決したい、まちの課題を何とかしたいと思っている若者が多いと思いますので、ぜひそういう学生や若者

が地域の課題により目を向けていけるような、そういう場を商工会議所サイドとしてもつくっていただけるとありがたいなと思っております。

[石田委員]

先ほど佐々木委員からお話のあった小・中・高みたいな話で、最近高校と大学の連携、いわゆる高大連携という形でいろいろ進んでいるところもあって、私は宮城野高校に毎年探求型学習というので行っています。分野だけ決めて、その中から自分でテーマを決めて取り組んでもらうのですが、高校は探求学習に割ける時間も少ないので、まちの課題などを先にリストアップして、こんな課題があるよといった課題探求の入り口を与えてあげると最初の取り組みのきっかけがつかみやすいのかなと思っています。大学では高校に比べるとゆとりがあるのと、探求学習のスキルが一応あるので、課題を自分たちで探していけるのかなと思っています。若者アワードみたいなところに大学生の発表もあって、高校生の発表もあって、中・小というふうに入り口の与え方を変えながら、ハードルは上がっていくけれども、大学生になるとすごくいいものが出来上がっていくのかと思います。高・中・小とみんなが見ていると、先ほどの視点でいうところの関わりを期待したい特定層の特に若者のところが広がってくる、場合によっては裾野が広がっていくということもあるのかもしれないですし、そういうふうにつながっていくと面白いのかなと思います。

[高浦委員長]

SDGs教育というのも、今高校、さらに小・中でも求められている中で、仙台市としても選定都市ということで、そういう課題感でぜひ、高校生を中心に、高校の協力、先生の協力も仰ぎながらできればいいなというふうに思います。石田委員が代表をしている「ゆるる」という団体では、高校生の夏のボランティア体験事業というものをされていて、10年以上歴史ある中で、コロナ禍であるけれども、全県対象でそういう場をつくらせてもらって、受入れ数の2倍くらいの応募があります。その動機も、自分の生きがいのようなものを見つけないという声が多かったりして、やはり高校生も18歳以上の若者と同様に自分たちのまちのことを考えたいという思いが、きっと仙台市内にも多いはずなので、ぜひ高校にもまずは広げていただけるとありがたいなという気がいたします。

また、起業家のまちを目指している仙台市ですので、社会起業家という視点で事業をどんどん生み出していただくという点では、若者版の協働事業提案に応募できるくらい組織としての体裁を整えてもらう、そうした社会事業の創造というところまでのアドバイスを、商工会議所や大企業にお勤めの方でも結構かと思いますが、プロボノの活用とか、事業化の仕方やそのための役割分担など、起業教育というところも事業者の協力を仰ぐことができたらいいなというふうに思ったりしています。

佐々木委員、どうですか、若者だけに限らず、事業化というところまでいくのは難しいというお話を先ほどいただいていたけれども、どういうパートナーがいるとうまく事

業化の軌道に乗せていきやすいでしょうか。

[佐々木委員]

やはり時間はすごくかかって、そういう土台づくりという環境づくりから、かなり年数を重ねて、そういう時間の中で子供たちのマインドやスキルが育まれていくということがすごく重要なのかなと思っています。

私は子供支援をしているのですが、実はそこで小さいながらもこういう仕組みをつくっています。小学生の生きる力を育むというところを主軸にしているのですが、子供たちのやってみたいをかなえようということを、最初は大人が伴走していましたが、今度それを卒業した中学生が小学生に伴走し始める。そうすると、中学生がすごく成長して、今度小学生から上がってくる事業が素敵になって、さらに精度が上がってという、この循環が今起きているので、実はそんなに壮大なことではないだろうなと思います。確かに石田委員がお話いただいたように、課題の与え方みたいなところはあると思いますけれども、子供たちはもう何か楽しければどんどんトライして、本当にまちなかにもどんどん出て行って自分で構想するということができるので、すごくいいなと思っています。

あと、その中で、私どものNPOで実はプロボノが40名いらっちゃって、その子供たちを伴走するのがそのプロボノなんです。いろんな企業のプロボノが集まって、自分たちの事業では社会貢献の実感をなかなか得にくいということで、子供の貧困という課題を解決する団体に所属しながら、子供たちをサポートしたいという思いのある方が集まっちゃって、大人と子供の素敵なコラボレーションが今起きているといったところがあります。ただ、多様な方が集まれば集まるほど、目的を1つにするというのがすごく実は難しく、協働3.0の時代とも言われていると思いますが、目的を1つにしてやっていこうねということも大事ですが、その方々の一人一人の目的が達成できる設計にしていくといえますか、そういうことを実際やりながらも、私もいろんな世界的な事例を勉強しながらも、すごく今感じております。イギリスのロンドンのエディンバラ・フェスティバルがまさにそういう設計になっておりまして、何か1つ目的を掲げてそのためにやっていきたいと思いますというよりは、市であったり、政府であったり、観光であったり、あとは経済団体が達成できる目標を指標化し、それが達成できると最終的に大きな社会インパクトを達成するといった設計の仕方を協働3.0という形でやられてすごく成功していて、それが今波及しているといったところであったので、私も小さいながらもそれを参考にしながら今トライアルしているところでした。

[高浦委員長]

そのフェスティバルは、大人と子供が共に参画するようなものですか。

[佐々木委員]

フェスティバルは、大人の、国を挙げてのイベントになりますが、石塚委員からもお話があったように、なかなかやりたいこととか目的といったものを、多様なステークホルダーが全部、全員一致するのはすごく難しいので、協働3.0という形で、その所属するステークホルダーの方々のそれぞれの目的が達成すると、自然に大きな目的が達成するという取り組みをしているので、私も参考にさせていただきながら今事業をやっています。

[高浦委員長]

気候変動問題もそうですね。利害がぶつかり合う中で、どういうふうにするかという方向性を見いだしていくのかというのが世界的にも注目されているアプローチなのかなと思いますけれども、大人社会もそうだし、また若者も、またその下の子供たちも、そういったまちづくりを学ぶ場がどんどんできてくるといいですね。

あと、若者版の提案制度のほうは、審査員からコメントがあったりして、そのあたりの改善状況をご覧になっていくということだと思いますが、プロボノ活用事業のほうは、次年度につなげていくための事業評価をどうするのかというところは、いかがでしょうか。

[事務局（事業推進係長）]

今年度の事業では、1月までで一旦一定の踊り場のようなところまでは行っていただいて、その後に例えばプロボノですとか地域団体側にヒアリングやアンケートを行うなどして、この仕組みが仙台市内で展開できるかどうかですとか、有効だったかどうかですとか、そういった分析を加える事項も業務委託の経費の中に入れてございましたので、その結果を見てから本来でしたら来年度以降の展開を考えていくという流れになるかとは思っております。

[高浦委員長]

募集時期の関係もあって同時並行的になるかもしれませんが、事業評価と新規募集と、評価結果なんかもまた共有させていただければと思っております。

ということで、お時間になってきておりました。活発なご意見頂戴しまして意見交換させていただきありがとうございました。ぜひ今後の市の施策展開に生かしていただきたいと考えております。

### 3 その他

[高浦委員長]

では、最後に次第3その他ですが、事務局から何かございますか。

[事務局（市民協働推進課長）]

特にございません。

[高浦委員長]

そのほか皆さんから何かございますか。特になければ、以上で本日の協議事項全てが終了いたしました。次回は2月くらい開催予定ということで、事務局から伺っております。本日は円滑な議事進行、ご協力いただきましてありがとうございました。進行を事務局にお返しいたします。

#### 4 閉会

[事務局（企画係長）]

高浦委員長、ありがとうございました。最後に、市民局長の佐藤より一言ご挨拶申し上げます。

[事務局（市民局長）]

本日はご活発なご議論を頂戴いたしましてありがとうございました。2つほど補足的に私のほうから申し上げたいというふうに思います。

1つは、現在、私ども仙台市全体として、区役所にもっとまちづくりの前面に立ってもらって区役所を中心に地域のまちづくりが進むような体制を整えていこうという方向で進んでおります。先ほど緑上委員から出たお話ですけれども、恐らく子育てグループの皆さんですと、区役所の家庭健康課と普段やり取りされていると思いますが、例えば高齢者の見守りなんかですと障害高齢課が担当といった話でありまして、やはり区役所の中でも縦割りが続いてきている状況であります。今、区長の下でのまちづくり推進部が区役所の横軸になるということを目指していきまして、その下に地域力推進担当という課長職がこの4月から置かれています。この地域力推進担当というのが遊軍的な存在でありまして、区内のまちづくりの課題やトピックスなど色々なものを拾い集めながら、それを大きく広げていくような役割を負っておりまして、例えばそういうところにお話を持ち込んでいただくというのも一つかなと思います。ただ、体制も始まったばかりでして、やはり区役所によってはまだ温度差があるのかなとお話を聞きながら思ったところでありまして、逆にねじを巻いていただければと。全てを区長の下で一本化していくという流れを目指しており、まだまだ発展途上ではありますが、ぜひまちづくり推進部地域力推進担当課長、もしくは先ほど傳野委員からありましたまちづくり推進課のほうに一度お話をもちいただければと思います。

それから、若者の関係ですけれども、総合計画を策定するときに、区ごとに子供たち、特に中学生から意見を聴く場を各区で持ちました。私、当時太白区長でしたが、中学生に集まっていただいて、10年後の太白区を考えてほしいというようなことで、ワークショップを行いました。各区で非常に盛り上がりまして、これは常設にすべきではないかという考えから、結果として市民局にまちづくり若者会議というものを置くという整理になりま

した。そして、まちづくり若者会議というものが、あるべき論をただ机の上で戦わずような組織だとちょっと違うのではないだろうか、若者には、自分の足で現場に行って、物を見て考えて、そこから出てくる何か答えを我々に見つけていただきたいという趣旨で、この若者ラボを始めてみたというものであります。来年度に向けて、少しやり方に工夫も必要かなと思っております、予算がつけばということではあります、来年度に若者のニーズを把握するためのアンケート調査をやってみようかと考えております。市のどんなことに関心があるか、まちづくりに関わった経験があるか、そのきっかけは何であったかというようなことを中心に、若者の本当の気持ちを聞いてみた上で、このラボとか新たな展開を考えてみたいなと思っております。その際にはいろいろご意見を頂戴したいと思っておりますので、引き続きよろしくご意見申し上げたいと思っております。

本来でありましたら、9月に第1回の委員会を開催する予定でございました。新型コロナウイルス感染状況を鑑み中止とさせていただきますけれども、幸い、このように会議を開くことができまして大変うれしく思っておりますのでございます。

協働によるまちづくりの推進に向けましては、今日ご議論いただきました若者をはじめ、多様な主体の参加が不可欠でございます。今後、より多くの市民の皆様にもまちづくり、そして市政に大きく関心を持っていただきまして、ご参加いただけるように引き続き委員の皆様からもご意見を頂戴いたしてまいりたいと考えております。

市長が「コロナ禍という困難な状況においてだからこそ、多様な主体の皆様と共に力を合わせチャレンジしていく協働の取り組みが大きな力を発揮する」というふうに申しております。この言葉どおり、市民局市民協働推進課、しっかりと委員の皆さんのご議論をいただきながら施策を前に進めてまいりたいと思っておりますので、引き続きご指導方よろしくご意見申し上げたいと思っております。本日は大変ありがとうございました。

[事務局（企画係長）]

以上をもちまして令和3年度第1回仙台市協働まちづくり推進委員会を閉会いたします。本日は、お疲れさまでございました。—了—

〈議事録署名人〉

[委員長] 高 浦 康 有

[署名人] 大 庭 克 己